



○明治八年一月、新聞誌抜寫
 ○太政官記事印行御用被申附、新聞社
 ○地所名称改定之御布告
 ○一月一日二日三日御祭典并祝賀 外國公使祝賀ノ式
 ○一月十八日御歌會始御製并都鄙迎春歌數首
 ○一月四日政始内務省奏上 ○同警保寮奏上
 ○戶籍寮奏上 ○同驛遞寮奏上
 ○同土木寮奏上 ○同地理寮奏上
 ○一月四日政始陸軍省奏上 ○全國教育ノ概略
 ○學校苦情ノ論
 ○邊事ノ論 静岡 中島雄
 ○代日報社編者答朝野饒舌君 若江燹吉

西垣文庫
 文庫10
 7353
 3



文庫10
7353
3

太政官記事印行御用被申附候條此旨相建候事



東京日々新聞社

東京府

内務省 大藏省 陸軍省 教部省 工部省

宮内省 開拓使 警視廳 東京府

右ノ諸省使廳府ノ記事刊行御用我ガ日報社ノ命
セラレタルニ付以後ハ皆ソノ録事ヲ區別シテ掲ゲ録ス

日報社

太政官記事

〇 第二號

明治六年^{七月}第二百五十九號布告日本坑法第八章中^{揭載}有之

候坑物稅收納ノ候本年一月ヨリ當分ノ内相廢候條此旨布告候事

明治八年一月十三日

太政大臣三條實美

○第百七十八號

今般地所名稱改定候ニ付テハ從前ノ官廳地、官用地ト改從前官用地ハ其所用ノ事故及ビ反別坪數等取調名稱定方内務省ノ可伺出此旨相達候事

明治七年十二月廿八日

太政大臣三條實美

太政官記事印行御用被申附候條此旨相達候事

東京日々新聞社

東京府

太政官記事

○一月一日

午前五時四方拜 其式

同時 賢所 皇靈 神殿御祭典 其式

同第八時 聖上皇太后宮正殿ニ出御三職及ビ院省使廳府縣在京

京勅任官 朝拜 其式

同時ヨリ九時ニ至ル 院省使廳府縣在京奏任官宮内省參賀

同第九時親王爵香間詰華族 朝拜 其式

同時ヨリ十時ニ至ル 在京有位華族宮内省參賀

同第十時在京判任官各廳へ參賀

同時各國公使及こ其書記官等内宮ニ於テ 朝拜英國公使各國公使

總代トシテ賀正表ヲ上ル

新年ノ佳辰ニ際シ貴國在留各國公使等誠心以テ

陛下ヲ祝シ平安親昵ノ交誼ヲ 陛下ノ各國ト保有シ給ヘルヲ

歡喜シ本年ニ於ル殊ニ貴國臣民盛昌繁榮ニシテ

陛下并 皇后陛下ノ益幸福ナランコトヲ期望ス

勅語

新年ノ佳辰ニ方リ各友國ノ公使ヨリ誠意ノ祝詞ヲ述ヘラル、

「欣喜ノ至リナリ各友國ノ君主及こ大統領ニモ皆無恙新禧

ノ祝賀ヲ迎ヘラレシコトヲ祈念ス卿等モ不相替無事ニテ越年

珍重ノ事ニ候

禮畢テ各退出ス此日公使ノ席次左ノ如シ布哇國代理公使及こ西班牙國

國書記官姓名ハ畧之

大不列顛國特命全權公使 ハルリーエスパークス

伊太利國特命全權公使 コントアレサンドロフエ

法朗西國特命全權公使 フキペルトミー

米利堅合衆國特命全權公使 ジョシ エビンハム

獨逸國辦理公使 エム フオンブラント

荷蘭國兼瑞典那威國辦理公使 フオン ウエックヘルリン

オランダ國代理公使 シデ グロード

白丹義國辦理公使 シワリエ デシッフル

埃地利國辦理公使 スツル ウエ

露西亞國辦理公使 セー エフエルモール

ネ 魯國代理公使

午後第二時院省使御雇外國人在東京奏任以上二准又ハキ者
宮内省ハ參賀

本日午前九時第三職以下勅任官及二同時親王、麁香間詰華族等
皇太后宮ハ拜賀

○一月二日

午前第八時 賢所 皇靈 神殿御祭典其式略之

○一月三日

午前第八時 賢所以下御祭典其式前日

同第九時元始祭 賢所 神殿 御親祭三職及二院省使廳府
縣勅任官祇候其式略之

同第十一時 賢所 皇靈 神殿、皇太后宮、皇后御拜

宮内省錄事

明治八年一月十八日御歌會始

題者 從一位 中山忠能

點者 宮内省三等出仕福羽美辭

贊者 侍從 堀川康隆

同 侍從 富小路敬直

同 宮内省十等出仕渡忠秋

讀師 正二位 松平慶永

講師 從四位 伏原宣足

發聲 正二位 綾小路有長

講頌 正二位 正親町實德

同 正二位 橋本實麗

同 同 同 同

從二位 大原重徳
從二位 池田慶徳
侍從 綾小路有良
大伶人 東儀季子熙
大伶人 林 廣守
大伶人 山井景順

都鄙迎春

御製

都よもろなき里よもあたらしま同一年を八打むかへつ

皇后宮

鄙都むらぶる年のよけさに知るもあらすもうとふ御代な

玉敷の都も鄙もへとてなき年をむらぶる御代の四ろけさ
二品 親子内親王
有栖川熾仁親王

家毎より、ころはと此朝日影都もひなもあふく年々な
二品 有栖川熾仁親王妃董子
祝ふこしうな

先ひらくこと葉は花の都より鄙も隔てす
宮内卿 徳大寺實則

松の門も玉はうてなも打あひくたての風
宮内大輔 萬里小路博房

山里は松のうてなも立年を都一のふ
侍從長 東久世

あたらしま年よあひの草は屋も玉
式部頭 坊城俊政

あまさるる鄙の東路明初て都のよし
題者 從一位 中山忠能

賤くも年の始よいもふれを各よあふ花の都のこり
題者 從一位 中山忠能

ありしまの今年ハそれよ何せん
贊者 侍從 堀川康隆

内日刺みまこもひなもあへて心長閑
贊者 侍從 堀川康隆

八十浦は浪もるるよい、くらん國の都の年ハ初風
贊者 侍從 富小路敬直

大縣をありともみな大宮を造らん賛者 宮内省十等出仕渡忠秋
 玉うまのうらつみくよも八十島も讀師 正二位 松平慶永
 田こひさハ都のこりハおーなへて津講師 從四位 伏原宣足
 大君ハ都もひかハ民の戸もむり發聲 正二位 綾小路有長
 をさまハる田こけさ御代にあり講 正二位 正親町實徳
 雲丹よりをちハ里まで立のほ講 正二位 橋本實麗
 來る年をいもふ心ハ雲の上も講 從二位 大原重徳
 新らしき年をむかへていも講 從二位 池田慶徳
 賑ひてむり講 侍從 綾小路有良
 といくよもまつらふ年の式部大屬 飯田年平

右於
御前構式

右之外官員華士族僧侶平民詠進明治八年一月十八日迄
 凡千三百六十一名比較去明治七年諸方詠進凡二千七十六
 名

○一月四日政始内務省奏上

内務卿^臣大久保利通代理内務大丞^臣林友幸謹白
容歲本省創置以來日タル猶淺ク而シテ内外事アリ臣利通屢命ヲ奉シ外ニ在リ專ラ省務ヲ調理スル能ハス然レトモ各主任ノ勉勵ニ依リ百事稍ニ緒ニ就ク者アリ爰ニ諸寮ノ申告スル所ヲ併ビ以テ上奏ス其事細大アリト雖モ要スルニ皆國家ノ慶祥人民ノ康福ニ係ル亦以テ民知漸ク開ケ性徳日ニ新ニ物カ普存シ生産饒足之兆ヲトスルニ足ル此固ヨリ陛下宵旰勵精圖治ノ致ス所^臣何ノ力カ之有シ伏惟ニ方今戒嚴漸ク弛ミ衆庶業ニ安ニス當ナニ大ニ内治ヲ整ヘ以テ人民和平ノ氣象ヲ保全シ國家治安ノ根基ヲ堅固ニスヘシ^臣及ハスト強モ欽命委任ノ事務當リニ奮勵カヲ竭シ以テ擔保ノ責ニ任スベシ謹シテ此事ヲ奏シ以テ陛下無窮ノ慶福ヲ祈ル^臣誠恐誠惶頓首

明治八年一月四日

内務卿大久保利通代理

内務大丞林友幸

大政大臣三條實美殿

○同警保察奏上

氏壽謹白嚮ニ内務省ヲ置レ尋テ警保ノ開察爾來殆ト一閱年方ニ
全國警察ノ事ヲ調査シ警邏設置表賊難表及三府四縣事故表等共
ニ整頓ニ及ベリ茲ニ其梗槩ヲ舉ルニ凡ソ全國警邏ヲ設クルノ數壹萬六千三十七
人屯所ヲ置クノ數七百一賊難事故ニ至テハ水ニ溺ル、者ヲ助クル百三
十五人自殺スル者ヲ助ル二十四人危難ニ遭フ者又ハ因却スル者ヲ救
フ凡二千三百四十四人大火ニ至ラントスルヲ防止スル事十四日且ツ走レ賊
難ニ罹ル者凡七萬三千四百十九戸殺害セラル、者凡六百四十八人賊

災ニ罹ル者凡四百五十六戸奪掠セラル、金員殺代凡五十三万六千八百七十
圓餘而シテ人ヲ傷シ及亂暴雜犯人ヲ捕縛スル者三百六十二人強竊盜ヲ
捕縛スル者一万六千九百四人以上方今警察ノ大畧ナリ且事故賊難
ノ如キハ容歳一月ヨリ十月マテ算スル所ト雖モ其各地人民ヲ保護
スル者ト保護スルヲ得ザル者ト又以テ鑑スベシ況マ方今人智日ニ進ミ
奸惡等隨テ長ス講フ速ニ警察ノ設置テ嚴ニシ良民ヲ保全セザル
可ラス今ヤ警察設置ノ法ヲ講シ案已ニ成ル不日上呈セント欲ス其
幸ニ允可ヲ賜ハ、勵精從事冀クハ警保實ヲ舉ゲ良民生ヲ聊
ニシ頑民罪ヲ畏レ齊ク聖化ニ浴セシメ永ク衆庶ノ安寧ヲ保護セ
シ文レ此ノ如クニシテ而後 朝廷至仁保民ノ盛旨偏ク闔國ニ光
被セン一ヲ跂足シテ俟焉頓首再拜 警保權頭村田氏壽

内務卿代理林友幸殿

○同戶籍察奏之

讓謹白伏惟ニ戸口ノ蕃息以テ仁澤ノ渥ヲ表スベク民庶ノ善良以テ文
化ノ盛ヲ徵スベシ夫レ前年編審スル所明治五年人口三千三百十二萬八
百二十五人今茲進呈スル所六年人口三千三百二十九萬八千八百八十七人
之ヲ前年ニ比スル生齒ノ増加スル者十八萬八千六十二人是固ヨリ流氓ノ
籍ニ歸シ隱漏ノ版ニ登ル者アリト雖モ一歳ノ間充羨ノ數此如キノ夥ニ
至ル豈休息生養ノ効ト謂ハサルベケンヤ加之孝義德行ヲ以テ譽ヲ
鄉閭ニ播コス者一千七百九十七人勲功勞役ヲ以テ名ヲ職事ニ顯ス者
一千二十四人賢ヲ損テ金ヲ施シ以テ學校ヲ興シ土功ヲ助ル者其人
八千八百八十名其金三十二萬六千五百拾四圓是昨年一月ヨリ十二月
ニ至リ錄シテ褒賞ノ典ニ在ル者ヲ舉ク其見今審議中未タ行賞ハラ
經ナル者ハ焉ニ與ラス豈文運開明ノ徵ト謂ハザルベケンヤ抑一察ノ

所管ヲ以テ治化ノ端ヲ考フヘキ者亦猶此ノ如シ况マ諸省察司庶績
咸熙集テ以テ鴻業ヲ大成スル者其休美勝ケテ道フヘケンマ是固ヨリ
明良際會ノ盛徳ニ由ルト雖モ其衆務ヲ積累シテ以テ 皇猷ヲ翼贊
スルニ至テハ則チ吏民ノ一職ヲ奉シ一役ヲ執ル者ト雖モ夙夜相戒勵ヲ將
ニ苟クモ職務ニ當ル者ヲシテ大トナク小トナク黽勉從事以テ民ヲシテ富庶
且教アリテ仁澤ヲシテ益渥ク文化ヲシテ益盛ナラシムルヲ期セントス謹テ戸
籍察掌管スル所一二事ヲ舉テ以テ陳稟ス伏請閣下採擇シテ上奏セシ
ヲ讓頓首再拜

明治八年一月

戶籍頭杉浦讓

內務卿代理林友幸殿

○同驛遞察奏上

密謹テ白ス凡ソ政令ノ四方ニ快速シ物情ノ遠近ニ響應スル國脈愉
通交際開進ノ大成機關ニシテ實ニ明世ノ治徵トス抑郵便ノ事
業タル制定其日淺シト雖モ線路ヲ通スル壹萬餘里局ヲ設ク
ル三千餘所延テ琉球樺太ニ及ホシ郵送ノ信書新聞等月ニ加ヘ日ニ
増シテ全ク籌外ノ夥多ニ至リ邦内到處ニ政令ヲ達シ又物情ヲ
響應ス且海外ノ通信ニ於ケル已ニ米國ト約ヲ締シ苟モ文明ト稱ス
ルノ國ハ皆吾郵便切手ヲ用テ我カ書ヲ達スル道ヲ疏シ吾帝國ノ
氣息ヲシテ直チニ世界ニ快通シ交際開進セシムルヲ得實ニ明世
ノ治ナラスシテ安ンゾ斯ノ如キ盛大ヲ爲サシマ本年新々ニ郵便爲
替ノ業ヲ開キ又貯金額ノ方法ヲ興テハ金貨融通貿易隆起ノ一端
ヲ舉ケ小民有産風俗淳厚ノ一助ヲ副エン今密カ責任中ノ一二事ヲ

稟告シ謹テ尙將來ノ盛事ヲ冀望ス頓首再拜

明治八年一月

驛遞頭前島 密

内務卿代理林文幸殿

○同土木察奏上

省一郎謹白ス維新ノ皇化闔國ニ浴ク開文明理ニ進ムニ際シ土木
ノ事業モ漸ク短ク捨テ長ク取り官民同一之ヲ實際ニ築成ス
爰ニ直管及ヒ地方廳由牒スル所ノ河港道橋等ノ成エラ概計ス
ルニ修築スル河堤四箇所流脈變更ニ運輸ノ利ヲ開ク河川二箇
所修築スル安畧一箇所迂ヲ捷ニ變革スル道路十箇所新式ヲ
以テ架スル橋梁二十三箇所其他耕地ノ爲メ開墾堤堰ヲ修營シ
人民交通物産搬送ノ料メ修覆スル道梁ハ枚舉ニ遑アラズ其

經費ハ總金松六万五千九百八十四圓餘ニテ官出金九萬八千拾三圓餘民費金六萬七千九百七十圓餘ト支レ道橋ハ外交上ニ關涉堤防ハ貢租收納ノ基ニシテ此事業ノ成功ハ既ニ上ノ如シ之全ク帝德宇内ニ決洽シ兆民遵奉スル所以ニシテ乃チ當察ノ掌管ニ係ル以テ之ヲ謹白ス頓首再拜

土木頭林友幸代理

明治八年一月

土木權頭石井省一郎

内務卿代理林友幸殿

○同地理察奏上

讓謹白抑 皇威煥發シテ大ニ版圖ヲ混同シ王化宣布シテ洽ク民物ヲ澤潤ス寬大ノ政其効誣ベキニ非ス文明ノ治其驗復何リ疑シ免ニ前年進呈スル明治五年反別表之ヲ今茲上申スル昨六年ノ表ニ比較スルニ其增加スル拾五萬千七百三町七反九畝七分此皆荒ヲ鋤シ廢ヲ興シ民庶ノ勉力乃チ爾リト云ト雖モ之ヲシテ能ク如此ニ至ラシムルモ此豈偶然ナラシマ從前苛刻ナルモノハ寬縱シ紛亂ナルモノハ清飾シ錯雜ナルモノハ明辨シ不公ナルモノハ平準シ各所有ノ權ヲ定メテ共ニ自主ノ理ヲ得セシム此レ其民力普存ヲ致ス所以ニシテ之ヲ寬政文治ノ効驗ト言ハサルヲ得ス土田日ニ開ケ民生月ニ厚雨露ノ澤以テ山林ニ洽ク不殺ノ仁以テ樹木ニ及フ可ク今本寮命ヲ奉シテ全國ノ官林ヲ檢查シ其反別木數ヲ表録上呈スルヲ

得タリ竊ニ以爲ク向キニ割據支離ノ制ヲナスモノ今マ一致大同ノ法ニ歸シ
某數ヲ錄シテ之ヲ政府ニ收メ其保護ヲ受クルヲ得ルハ、樽節時
アリ愛養具ニ至リ斧斤狀賊ノ害牛羊踐履ノ患ヲ免レ皆能ク其
材ヲ成スヲ知ル夫レ如此クハ船艦以テ造ル可ク宮室以テ築ク可ク其用
勝テ極リナカルベシ其ヲシテ成効如此ニ至ラシムル此レ讓今ヨリ深ク希望スル
所ニシテ閣下ノ厚ク注意アラニトヲ望ム故ニ本寮所管此ニ事ヲ舉テ以
テ稟告スルニ方リ既往ノ成蹟ヲ頌道シ將來ノ事業ヲ豫言スル如此閣
下幸ニ採擇アツテ上奏アラニトヲ乞願首再拜

明治八年一月

地理頭杉浦 讓

内務卿代理林友奉殿

○一月四日政始 陸軍省奏上

臣有朋謹言夫レ本邦ノ地タル沿海數千里防禦ノ策緩クス
可カラズ此レ曾テ陳スル所ニシテ既ニ命ヲ得ル所ナリ蓋シ長崎
鹿兒島下關ノ如ク豊豫及ビ紀淡ノ海峽石卷箱館等ノ如キ皆
當サニ大ニ砲臺ヲ設ケ多ク利器ヲ備フ可シ而シテ又此ヨリ急
ナル者アリ近海ノ固メ是ナリ請フ先ヅ相州觀音崎總州富津
岬等ノ數所ニ於テ堅牢ノ砲墩ヲ築キ萬一事アルノ日ニ當リ鞏
下枕ヲ高スルノ安キナラシメン因テ今畧圖一葉ヲ獻ス其方法
ノ如キハ敢テ他日ヲ期ス臣有朋謹テ奏ス

明治八年一月四日

陸軍卿山縣有朋

○全國教育ノ概略

○申八月學制頒布以來興學ノ舉日ニ多ク月ニ熾シテ各地方ノ教育漸次實際ニ赴キ中小學校及ニ就學生徒ノ數學資納附ノ高等陸續増加シ其方法ニ至テハ各地異同ナキヲ得ズト雖此之ヲ要スルニ誘掖獎導ヲ旨トシ學資課賦ノ方法ヲ定メ教科ヲ簡易ニシ教員ヲ督勵スル等其力ヲ茲ニ竭スニ至テハ彼此一轍ニシテ人智長進治化洽浹ヲ裨補スルノ基タルニ外ナラズ今其教育ノ實況ヲ概見スルニ第一第二第三大學區ヲ以テ最トナシ第四第五大學區之ニ亞キ第六第七大學區又之ニ亞ク蓋全國七大學區ニシテ中學區ノ數二百四十六小學區ノ數四萬四千六百七十九公立中學三校私立中學十七校公立小學七千九百九十五校私立小學四千五百六十三校外國語學三十三校ニメ中學ノ教員百廿五名小學ノ教員

二萬五千五百卅一名外國語學ノ教員五十七名小學ノ生徒日九萬七千六百十二人 男九十八萬七千九百九十七 女三十一萬四百五十五

ニ及フ之ヲ全國ノ人口百人ニ照較スルニ大約二十分ノ一ニシテ人口百人ニ四人一セトス然レハ此數タル或ハ未タ開申ニ及ハス或ハ擾亂ニ罹ル等ノ一アリテ點檢ニ由ナキモノアリ故ニ未タ全數ヲ得ルニ至ラス而テ興學ノ經費ハ華士族ヨリ以テ農工商ニ至ルマテ各其產資ヲ割テ之ヲ寄附スル者亦屈指ス可ラス多キハ一縣四十七萬余圓ニ及ヒ少キモ數百圓ニ降ラス其課金方法ノ如キハ各地方ノ情態ニ應シテ均一ナラス粵ニ本年學資所入ノ金額ヲ計ルニ無慮百九十三萬九千九十八圓三十八錢三厘其所出ノ數百五十七萬百七十八圓七十七錢九厘ニシテ約金ノ高出金ノ高ニ過ルコト三十六萬八千八百十九圓六十錢三厘ナリ抑勸學ノ志善ヲ鼓舞シ蒙昧ノ漸ク闡明ニ赴クヤ殆ト曩日ノ比ニアラス是ニ由テ之ヲ觀レハ

文運隆起ノ日ル期シテ族ツヘキナリ

○ 學校ハ開化ノ基礎ニシテ暫時モ忽ニスベカラザルハ論ヲ待タズ然ルニ當今
世間ノ學校ヲ熟視スルニ何レモ器々苦情ノ無キハ稀ナリ其起リハ
生徒父母タルモノ教則ノ速カニ實際上ニ益ナキヲ怨ミ内心不平
ノ色ヲ顯ハセリ是モ又強ガテ制シカタシ第一教則ト年齢ト對
應スル故ニ十歳以上ノ者ニ六七才ノ學ヲ授テ六ヶ月間空シク束縛シ
然ノミナラス教則ノ變更時々コレ有リ折角習ラレ得シ智慧ノイ
トグチ杯モ廢止ト成リテハ勞シテ功ナシ又問答ニ烏ガ黒イノ猫
カ鼠ヲ取ルノ南瓜ガイツ花ガ咲ク杯ハ習ハズメモ知リ又ヘシ又
年號ハ諸誦ニ及バズハ熟讀ニテモ可ナラシカ先ヅ現今民間ノ日
月ハ吾ガ近里ノ村驛ノ文字人ノ名頭マ國盡シ等々教へ而シ
テ漸々萬國ノ風土地球ノ運轉等ニ至ラバ是レ近キヨリ遠キニ

至ル順序ナラン又試験ノ前ニ至リテハ覺ヘノ能キ生徒ヲ撰シテ同シ
日夜勉勵鈍ナル生徒ハ追込ニシテ見向モセズ彌々檢査ノ時モ
教師ヨリ兼テ注文通りノ題ヲ出スニ依リ受ケ答ヘノ速マカナルモ
敢テ稱スルニ足ラズ又數學ハ洋算ヲ覺ヘ散ラスヨリ和算ヲ先
學ナビ而シテ後ニ洋算ヲ學ナビタシ未ダ三府ノ豪商スラ店先ノ取
引上ニ洋算ヲ用ユルヲ見ズ又習字ハ楷書ノミノ手本ニテハ書狀帳
面等ニ不都合ノ一モアレバ少ハ行草モ交エテ可ナラシカ實ニ貧家
ノ生徒ニ於テハ七八オヨリ家ニアル時ハ兒守ヲ役トシ十餘歳ニ及ベハ傍
活計ノ手助ケニ暇ナケレバ迂遠ノ一ハ後廻シニシテ今日差當リ入用ノ
學問ヲ渴望スルナリ嗚呼富家ニハ資金ノ小言アリ生徒ノ親ニ教
則ノ小言アリ教師ニ月給ノ小言アリウルサイ哉くく余貧生徒ノ
代言人ニ雇ハレ止ム一ヲ得ズ右ノ苦情ヲ陳述ス其可不可ハ余ノ
知ル所ニアラズ

西駿 寒兒資保

邊事ヲ論ズ同人社 辭岡 中島雄

方今天下大ニ憂ベキ者アリ何ゾヤ則チ我ガ北邊ノ魯西亞コレナリ蓋
シ魯人ノ我國ニ垂涎スル其來マ尚シ在昔征夷大將軍幕府ヲ
鎮スルノ日既ニ究北國境ノ論ヲ起シ辨論彌旬五十ノ北緯ヲ以テ
兩國ノ境界ヲ定メント欲セシガ其議熟セズ遂ニ雜居ノ約ヲ結ビ
是ヨリ以來互ニ開拓ヲ競フ故ニ幕議北海ノ數郡ヲ割テ奧
羽各藩ニ分與シ其開拓ヲ督責スレト偶々^内國疲弊ニ會シテ
開拓甚ダ振ザルナリ朝廷維新ノ日ニ當リ益北海開拓ノ急
務ナルヲ知リ新ニ北海道ヲ置キ初テ開拓使ヲ設ケタレト魯人
我ガ振ハザル時ニ乘シ其開拓ノ功ハ眞ニ驚クベキ進步ヲ爲シ

回ヨリ既ニ五十度以南ヲ蠶食シ殿々トシテ日ニ進ミ方今に至リ
テ勢ニ既ニ防禦ス可カラザルニ至ル夫魯人ノ樺太ニ汲クスル
ハ其志豈ニ樺太ノミナラシヤ南蝦夷ヲ併テ蠶食セント欲スルハ
三尺ノ童子ト雖モ能熟知スル所ナリ然レモ我ヲ以テ之ヲ考ル
ニ獨リ南蝦夷ニ止ラス遂ニ津輕南部ヨリ陸梁跋扈シテ鎮西
薩隅ニ至ント欲スルノ志ナルヘシ請フ今其必然ノ證ヲ説シ抑魯
西亞ノ領地ハ歐羅巴亞細亞亞米利加ノ三大洲ニ跨リ其亞米利加ニ
在テ魯西亞亞米理加ト稱シ殆ド我國ニ十倍スルノ地ニシテ近年ニ至
ルマテ魯國政府ヨリ頻リニ植民ヲ爲シタリシガ元來極寒ノ地ニ
テ且南ハ英國ノ植地ニ隣シ容易ニ蠶食スル能ハザル故ニ近年
ニ至リ斷然其地ヲ米利堅合衆國ニ賣却シ其植民ヲ樺太ニ移
住セシメ其ヲ以テ樺太開拓ノ用ニ充シム夫魯人ノ精算何ノ故ニ

延袤万里ノ領地ヲ拾テ彈丸藪圃ノ海島ヲ取ヤ是志ノ大ナルヲ知ニ
足リ又近年魯人其國都聖彼得堡ヨリ亞細亞東鎮泥歌拉士府マテ
鐵道ヲ設クルノ企アリト夫魯都ヨリ泥歌拉士府マテハ此間殆ド三
千餘里ノ隔絶ニ及ビ其道ハ彼ノ西伯利ノ曠原ニシテ氣候寒冽土地
不毛ニ屬セリ此間ニ於テ魯人ノ精算何リ數百鉅万ヲ費シ長
遠ノ鐵道ヲ設ケシヤ是其志ヲ大ニ東洋ニ得ント欲スルナルベシ既
ニ此ニ證アレハ魯人我ガ内地ヲ經略セント欲スルハ至明至亮智
者ヲ族ズシテ知ベシ且吾之ヲ聞ク魯人ノ果斷ハ古ヨリ史冊ニ照
然タル事ニテ昔シ法帝拿破崙第一世拔山蓋世ノ英才ヲ抱キ
既ニ歐洲ノ大半ヲ經畧シ五十萬ノ大兵ヲ提ケ魯西亞ヲ侵セシ
時魯人其都府墨斯科ヲ自燒シ法人ヲシテ凍餒ニ苦マシメ遂
ニ大ニ之ヲ敗レリ夫都ヲ燒ハ席上ノ談ナレバコソ容易ナレシ之ヲ

行ハ甚ダ難シ矧ヤ宮殿御比人家稠密全國冠首ノ京都ヲ
卒然烏有ニメ顧ミザルハ抑非常ノ果斷ナラスヤ

又二十年前ノ事ナリシカ英法合從シテ土耳其ノ爲ニ魯ト戰ヒ勝ニ
乘シ海上ヨリ將ニ西拔斯土ト見ヲ浸シト欲スル時魯人艦艦數隻ヲ
海峡ニ沉メ英法水師ノ侵入ヲ絶テリ夫國カラ盡シテ製造セシ大艦
ヲ一朝沉テ惜マザルハ是又非常ノ果斷ナラスヤ抑モ魯人果
斷ノ情常ハ大抵此ノ如シ是ヲ以テ北海ノ事ヲ所置スル片ハ我其
何事ヲ爲シ出スヲ知ザルナリ嗚呼方今邊境ニコノ大憂アリ然
ルニ我國ノ人民晏然枕ヲ高テシ口ヲ開ケバ開化文明太平無事ト
稱ス彼ノ賈生ヲシテ今日ニ在テコノ情態ヲ見セシメハ豈タ々々大息流
涕ノミニメ止マラシヤ然ラハ則チ如何シテ可ナルヤ我思ニ此間ニ處スルノ道
ハ他ニ非テス暫ク樺太全地ヲ魯人ニ賣リ而シテ帝都ヲ北海札幌ニ移ニ在

ナリ抑モ我ト魯西亞ノ條約ニ樺太ノ土地ハ相互ニ賣買スルヲ禁ジタリ
シガ勞スル片ハ報アルハ萬國ノ公法人間ノ通義ナルユエ魯人ニ我國
方今多端ニテ北海ノ開拓未ダ能樺太ニ及ビ難シ而メ貴國ニハ國力
既ニ盛ニシテ且此地ハ從來望マル所ナレハ今コレヲ貴國ニ附ベシ但
其中開拓既ニ成ノ場所ハ我國ヨリ多年許多ノ費ヲ出セシユ是ハ貴
國ヨリ購ハレト言フベシ蓋シ斯ク言フニ魯人ハ既ニ樺太ヲ視テ掌
中ニ在トセシ事ユエ必ス直ニ我言ニ從ハザル丁明カナリ然ル片我重テ
魯人ニ元來條約ハ萬國ノ公法人間ノ通義ニ由テ成者ナルニ今貴
國ノ公法ト人間ノ通義トヲ顧ミザレハ我モ亦向ニ締ビシ條約ヲ
顧ミズト言ヒ英法或ハ米利堅ニ此地ヲ賣ト唱バ彼レ名ノ邊隙ヲ生ズ
ル能ハズ辭ノ旨ヲ直ヲ取り我ヲ曲トスル能ハズ加之若シ果シテ樺太
ヲ南境ヲ強民ニ屬スルナレバ南境ニ一敵國ヲ生シ兼テ東洋ニ逞

忘スルノ大阻格ヲ爲ト思ヒ必ズ若干至當ノ金ヲ出シ樺太全地ヲ購フ
其金ヲ以テ遷都ノ費ニ充サバ都ヲ遷スニ於テ又大藏ヲ困難セシム
ルニ及ズ且宮闕向ニ災ニ係リ天子今離宮ニ在セラレ築宮ノ舉ハ遂ニ
已ラ得ザルノ事故此ニ築クノ費ヲ出シテ彼ニ築キ以テ子孫萬世帝王タ
ルノ都ヲ建ハ都ハ則チ官省ノ在ル所ニメ士人仕官ノ道ヲ求メ衆庶
生活ヲ爲ス所ナレバ令セズメ諸國ノ人民北海ニ移住シ開拓使一
百五十餘萬圓ノ額銀ヲ費ズメ開拓防禦ノ兩全ヲ得ベシ我故曰
方今我國ノ邊境ニ所スルノ道ハ暫ク樺太全地ヲ魯人ニ賣リ而シテ
帝都ヲ北海札幌ニ移スニ在ナリ」或者曰子ノ説ハ善シ然レモ遷都ハ
大事一朝メノ能行フ所ニ非スト嗚呼是何ノ説ナルヤ凡万事大ニ爲レハ
則大ニ濟小ニ爲レハ小ニ濟ナリ若平常行幸ノ轍ヲ踏ミ出ハ豈言シ
入バ蹕スルノ例ニ依テ遷都ヲ爲ハ其事甚難クレモ汽船數隻

六宮ヲ遷ス何ノ難カ有ニ昔シ北魏ノ道武ハ平常兵馬ノ際ニテ屢
バ都ヲ遷セ共生民ヲ騷動セズ又近ク今上皇帝陛下ノ東京ニ遷
都セラレシモ尙兵馬未ダ止ズ人情反覆常ナラザル時ナレモ簡ヲ主
トセシユス遂ニ何事ヲ生セス從來我國ノ形勢地脈西ヨリ東ニ但キ
神武日向ニ垂基セラシヨリ桓武鼎ヲ平安ニ定メ今上ニ至テ東
京ニ中興セララルモ既ニ其證ニテ更ニ又東セバ形勢地脈最モ宜ラ
得國勢ノ振起疑フ容ニ足ズ」或者又曰然ト雖モ今迄カラ盡シテ
爭シ樺太ヲ一朝彼ニ賣ハ甚ダ惜ク且帝都ハ全國ノ中心ニ占ル
ヲ善トシ邊境ニ都スルハ策ノ得者ニ非スト是亦所謂理ヲ知モノ
ニ非ズ何トナレハ魯人ノ望ヲ我國ニ爲ハ畢竟開拓ノ舉ザルニ乘シ
封豕長蛇上國ヲ吞食セシト欲スルニ今我北陸ニ都スルヨリ開拓
大成スレハ彼既ニ我地ノ隙ニ乘ズベキナシ然バ豈彈丸最前寒島

テ要シテ空シク金ヲ費シヤ日後必ず支那北境黒龍江地方ニ盡カシ
運々樺太ノ望ヲ絶スルハコレ又必然ノ勢ナラズヤ是ニ於テ我徐ニ國
殷ニ民富ノ日ヲ跋テ再ニ樺太ヲ復セント欲セバ此事亦難キニ非ズ
果シテ樺太全島ヲ回復シタラニハ我帝國ノ都府札幌ハ西北ニ於
テ樺太ヲ扼シ東北ニ於テ千島ヲ控シ南ハ本國四國九州ヲ負ヒ金
城湯池大日本帝國ヲ保護スル至善至良ノ地トナルベシ我故曰方
今我國ノ邊境ニ所スルノ道ハ暫ク樺太全地ヲ魯人ニ賣リ而シテ
帝都ヲ北海札幌ニ移スニ在ナリ

代日报社編者答朝野饒舌君 若江彛吉

おのま好み々日々新聞を讀むハ強ガらば其文章と好みも
非ず又其議論を好みも非ず只々吾曹氏ガ快筆もて目
覺一き程一いち早く書連りぬるをこそ好み一なる本月七日
醒世小言第七号水原君の論を朝野新聞に載たり一と吾
曹氏ハ翌八日の條に駁せられ十二日は又饒舌君ガ水原君ニ代
りて是に答へらるも其は是を人日朝兩社に間一一新筆戦を開く端
をありの吾曹氏ハ後にも云はず例の快筆もて何あら再駁をマ書
出さるべきと心待ち待ち一ハ早や十四日を過ぬまじと音形だよもな
こハ快筆此運びの弱り一もの論の種一盡す一もの急漸の戦一暇
なくりしものういかで去る事一ハあらうと思ふ一吾曹氏ハ饒舌
ガ代任して有るから筆敵一ハ面白うらぬと思ひ態を答へるさ

ぬものありぬよ〜去らばおのち吾曹氏に代りて再答を存し且つハ
愚考をも述ぶ〜代任の其人ありぬとて棄たまひてハこよ
なき幸ぞあしなり

天下ノ事務ニ於テ漸進スベキ者アリ急進ヲ要スル者アリ一槩ニ論
不可ラズトノ貴説ハ政ヲ行フ上ニ於テ實ニ然アルベキ事ナリ吾曹氏
ハ漸進ヲ主張シナガラモ此理ヲ悟リテヤ廢刀ノ禁ト自由出版ハ之ヲ
今日ニ行ナヒ顧慮スベキ事ナシト信ズトハ書レニキ○祭服ノ制。野郎
アタマ。涅齒剃眉ノ俗ト筮家相弊ヲ改ムルハ是教育ノ化ニ屬ス
ル所ニシテ政令ノ法ニ依ル者ニ非ズト云ヒテ下民ヲシテ在上ノ人ヲ見
習ハシメント論セシヲ饒舌君ハ漢學ノ大家先生ガ開化ヲ忌ミ固習
ヲ守ルモノヲ譬喩トナシテ此等ノ改革モ風化ニテハ歲月ヲ費スベ
シ白紙一枚ニ黒クト書タル三條ノ布達モテ政令ノ法ニ從ハシメヨ

ト云ヒ至ヘリ此三條ノ内ニテ「官吏兵隊巡查ノ外佩劍帶刀不相成
候事」ノ一條ハ吾曹氏モ同意ナレバ別ニ議論トテモナカルヘシ其
餘ノ二條ハ布達ニテ命スルヨリハ風化ニテ漸々ニ從ハシムルヲ好トナ
ム吾曹民ハ云ヘリキ○サマデ大關係ナキ者ナラハ其儘ニ置キテ風化
スルヲ待ツハ吾曹民ガ漸進ナリ布達ニテ一變スルハ君ノ急進
ナリ此間ニコリ自他ノ説ヲ異ニスル差別ハ有ラメ○君ハ口デツクヲ
用ヒテ若シ漸進ニ從ガヒナバ彼漢學者輩ガ麻上下ヲ著ケ推
髻佩刀ノ風ヲ弟子ドモニモ傳フベシト宣ヘドモ先ニモ述ベタル如ク佩刀
ヲ禁スル事ヲ定ムレバ推髻麻上下ダケニ止ルベシ之ヲ存スルユエ散
髮ヲ罵リ今ノ禮服ヲ刺リ其極意ニ政府ヲ怨謗スルニ至ルトナ
ラバ之ヲ禁シテ豈ニソノ罵刺怨謗ヲ止ムルノ理アルヘキカ○君ハ
又コノ一号令ノ爲ニ頑固ノ人ハ違背ナラズ怯懦ノ者ハ敬罵

怖シ清初ノ辨髮ヲ嫌フテ死シタル如キ者ハ多カラスト信シ去ヘリ
實其爲ニ死ヌル人トテハ有ルマシトオノレモ思ヘドモ頑固怯懦ノ
二者ガ胸中ニテハ此号令ノ爲ニ其不平ヲ増スハ目ノ當リニ
明カナリ○サレバ此推髻麻上下ヲ存シ置ケバトテ左マデノ
害モナク之ヲ禁スレバトテ左マデノ益ナキ許リカハ折角ニ啼キ
寢入ノ姿ニテ風化セラルベキ衛ニ入シ者ヲ激シテ又々不平ノ
志ヲ新タニセシムル丈ケノ損ニゾ有ルベキ

ト筮家相ノ迷ヒモ疑ヒモ早ク去ラシメ度キ物ナレモ迷疑ハ
教法ノ迷疑ニ同シクシテ之ヲ氷釋スヘキ學問ノ助ケヲ借テズシ
テハ決シテ之ヲ除キ能フマシ試ミニ今石ノ片ヤ土ノ塊リニテ拵ヘ
タル偶像ニ向ヒ現世ノ利益ヲ祈ルハ其詮ナキ事ゾカシ
之ヲ止メヨト命ズルトモ事ノ理ヲ知ラヌ愚人ハ其命ヲ服シテ此

偶像ヲ拜スマシキカカノレハ之ヲ請ケガハズ去レモ若シ法師ア
リテ此愚人ヲ諭シ西方ニ向ヒ彌陀ノ淨土ニ趣キ未來ノ安樂ヲ
願ヘヨ現世ノ福ハ必ラストモニ求メナヨナド、漸々ニ教ハナバ此學
問ノ爲ニ現世利益ノ迷疑モ解クベシト思ハル此學問ノ有
無ニ係ハラズ一概ニ之ヲ禁ズル時ハ却テ迷疑ヲ増サシム
ルノ種トナルベキノミ

祭服ト禮服トヲ一定ニセントノ說モ亦推髻ト散髮トノ如キ
同シ有様ニテ俄カニ之ヲ一定セヨト命ズルモイカバ有ルベキカ
麻上下ハ表向キニ廢シヌレト暫ラク衣冠ト共ニ祭服ト
見ル時ハ今日ノ實地ニテハ禮服ノ代リニ祭服ヲ用フルノ姿ナ
レド在上ノ風俗ヲ習ヒテ禮服モ出來スルナラバ未ニ祭服ノ
代リニ禮服ヲ用フル時ニ至ルベシ故ニ殊ナラシ号令モテ一定セ

ズトモノ事ト吾曹氏ハ思ヒシナラシ告朔ノ餼羊ハオレ尤モ同
案ニテ他日上下トモニ祭禮ニ服ヲ一ニスルノ時トナラハ責テ
高貴ノ方々ダケハ「ガルメント」ニ倣ヒテ聊カ今日衣冠ヲ殘
シ置キ度キモノゾカシオノレ固ヨリ君ト水原君トノ説ヲモテ急
進ナリト申スニモ候ハ子ド今日政治ノ上ニテ多キ改革ノ有
ル中ナレバ差シテ利害ナキ事ハ其儘ニ置テ風化ニ任セ度
シト望ムニナン君ガ宣フゴトク諸縣下ハ驚ク可キ野蠻ノ景況
ヲ存シ電線ヲ魔術トシ肉食ヲ毒物トシ新聞紙ヲ耶蘇ノ
一法ト爲ス程ノ開化セヌ人民ニ命シテ新禮服ヲ纏ハセ散
髮サスルモ何程ノ益カアルベキ麻上下椎髻ニテ置モ又何程ノ
害ヤアラシ改革ノ爲ニ膽ヲ寒シ居ニ安セヌ人民ナレハ憐ハレ頭服
ダケナリトモ其心ノマニ々サセマホシクナン

